

四川作家・沙汀研究－中国近現代農村社会を 理解する手がかりとして

天野 祐子

1. 問題意識と研究の現在

沙汀(1904～1992)は四川省出身で、1930～50年代の四川農村を舞台とする小説を書き続けた作家だが、日本では一般には知られておらず、中国現代・当代文学研究でもその作品に言及されることが少ない¹。歴史学研究を基礎にしている筆者が、その存在を知ったのは日中戦争から国共内戦期の四川省の農村基層社会を研究する過程で、沙汀に注目したのは、その作品が当該時期の歴史研究に生かせると思ったからである。沙汀の作品は1940年代の四川省北部の農村社会を舞台とし、そこに生きる「反面人物(社会主義の立場からみた反面教師的人物)」と社会の実態を活写しているものが多い。特に、日中戦争下、全国的に総力戦がさげられるなか、戦時徴発を支える基層行政の末端として機能していた郷長・保長・地域の有力者が利害をめぐって抗争にあけくれる様を生き生きと描いている。筆者はかつて国共内戦末期に国民政府が農民の支持を得るために小作料を引き下げた「二五減租」政策の実態について検討した²が、沙汀も『減租』という小説のなかで、減租政策が実際にはそれまでの慣習的な小作料の免除などが許されなくなるなど、農民にとって逆に負担になった様子を描いている。政策の実態が小説から垣間見えることもある。現在、筆者は関心を国民政府から人民共和国への政権交替期、1950年代以降の農村基層社会の実態に移しているが、その変化を同時進行で体験している沙汀の作品に研究の手がかりはないかと考え始めたのが、本稿執筆の動機である。

日本で沙汀の文学、作品研究をしているのは、尾坂徳司と中裕史である。尾坂は「沙汀おぼえがき」と題した3篇の論考で、沙汀の経歴と作品について詳細に紹介し、中華人民共和国の成立前後の人々の行動や意識形態がどのような段階を経て変化したのか、文学はそれらをどのように描いているのかに関心を寄せているが、作品の紹介は1949年以前の作品のみである³。四川出身の作家を重点的に研究する中裕史は、沙汀作品の特徴を他の四川作家との比較の視点から明らかにしている⁴。沙汀とその一生の友人である艾蕪(1904～1992)を比較し、沙汀は登場人物同士のいさかきを描き、地主や有力者、基層政権の実力者の跳梁跋扈を諷刺することをテーマにしているのに対し、艾蕪は社会からはじきだされた下層民が過酷な生活のなかでともに助け合いながら生きる様を描いているとし、作品世界の対照性を論じている。また、歴史学の関心に近い形で、「抓壮丁(兵士の拉致)」を四川作家がどのように描いたかを論じるなかで、沙汀の小説にも触れている⁵。いずれも作品研究が中心で、研究対象の作品も1949年以前に限られている。

中国では、沙汀が魯迅(1881～1936)や左翼作家連盟の支持のもとで文芸界に登場したことから、文学史のなかでは必ず言及される作家である。『中国当代文学研究資料』や『中国現代作家作品研究資料叢書』に関係する資料や研究が収められ⁶、文学史家に

よる伝記もある⁷。近年、その著作のほとんどが収められた『沙汀文集』も出版されている⁸。ただ、中国でも沙汀に対する評価は1930、40年代の作品に集中している。30年代の作品は魯迅や茅盾の関係で引き合いに出されることが多く、40年代は国民政府統治地域(「国統区」)の農村の暗黒部分を四川農村の口語を巧みに使いながら写實的に描くことに成功しているとされる。つまり、1950年代以降の作品については言及が少ない。その理由は文学史における沙汀の立ち位置をみると明らかである。

洪子誠の『中国当代文学史』を参考にすれば、次のようにまとめられるだろう⁹。中国の1940～50年初頭の政権交替期における社会の急激な変化により、中国文学の構成要素とそれらの相互関係に位置変動がおきた。すなわち、1942年の毛沢東(1893～1976)の『延安文芸座談会における講話』(以下、『文芸講話』とする)の発表を契機として、文学の様々な傾向や流派・勢力が再編成された。日中戦争を戦いぬくために、それまで主流だった1920年代以来の左翼文学が再検討され、最も理想的な文学形態が何か討論される際に『文芸講話』が綱領的な役割を果たしたのである。戦争中は「国統区」、共産党の統治地域である「解放区」、日本占領地域の「淪陷区」に分かれたが、『文芸講話』を経て人民共和国成立当初は「解放区」の文学(延安文学)が主流となった。

沙汀は、1930年代は左翼文学として、1940年代は「国統区」文学として位置づけられ、文芸界では名声は高かったが、1940年代にすでに社会の暗黒部分を客観的に叙述するスタイルが批判されている¹⁰。沙汀は共産党員でもあったので、主流に近づくべく、人民共和国成立以降は新しい表現対象と芸術方法を模索していたが、1950年代以降はつねに文芸界の周縁にあったということになる。こうした周縁化には、沙汀の出身地、創作の取材地、生活経験も関係している。文芸界の中心が東南の沿岸から西北、中原の地域へ移行し、陝甘寧・晋察冀・晋冀魯豫地区など革命根拠地があった地域出身の作家が脚光を浴びたからである。以上の全体的な流れから俯瞰すると、沙汀は共産党員であったが、文芸界の主流からはずれていたといえるだろう。それゆえ、沙汀は1949年以前の活動と作品が主な研究対象とされているのである。

歴史学分野においても、沙汀の代表的な作品が題材としている1940年代の農村基層社会の様相は研究蓄積がある。笹川裕史と奥村哲は長年、末端の民衆からの請願などを含む檔案史料を用い、日中戦争時に戦時徴発の中心だった四川省の基層社会の実態を明らかにしている¹¹。ただ、笹川らの研究は四川という一地域に対する関心ではなく、中国が国家総動員体制になったとき、その社会特有の矛盾が生じ、戦争遂行を困難にした側面や日中戦争を契機として基層社会が激変したことに着目している。同時に、日中戦争に続く国共内戦、朝鮮戦争といった戦争を契機として生成される戦時秩序や社会の変化を東アジア地域における比較史的な視点でとらえなおそうとしている¹²。

筆者もこうした問題意識を共有しているが、四川という一地域を掘り下げて、その地域特性を理解することから出発し、社会の実態をより現実味をもった形で再構成することにも関心がある。歴史学者の王笛は「袍哥」(四川省の秘密結社のメンバー)の歴史の実態を多方面の史料から明らかにしているが、「袍哥」の社会的な役割を読み解く際、沙汀の短編小説『在其香居茶館里(其香居茶館にて)』の1シーンを引用し、「袍哥」が地域の揉め事を茶館で調停・解決する「吃講茶」の流れをとりあげ、「袍哥」を背景

とする地域有力者、国民政府から徴兵・食糧徴収の任務を請け負っている基層行政の役人、周りをとりまく人がそれぞれの利害を守るために「面子」をたてながら地域の権力関係のバランスをとっている様を描き出し、政権交替期の四川社会の変化を語るうえでは欠かせないアクターである「袍哥」の実態をあぶりだすことに成功している。筆者は王笛の方法に啓発を受け、人々の日常の規範など地域固有のミクロな事象とその変化から政権交替期、50年代以降の四川社会を捉えなおすために、沙汀の小説を読解することは必要な作業だと考えている。

とはいえ、沙汀の小説創作の黄金期といわれる1940年代の作品の分析は、上記の日本や中国の先行研究でもある程度蓄積されており、筆者が研究してきた日中戦争から国共内戦期の基層社会の様子と作品をつきあわせ読み解いていくことにさほど意義があるとは思えない。一方で、1949年以降の沙汀や、農村基層社会の変化は研究が少ないか、緒に就いたばかりである。沙汀は人民共和国成立後も四川の農村基層社会を題材とする小説を創作し、そこに生きる農村基層幹部の姿、農民の覚醒や変化を描こうと苦悩した作家である。人民共和国成立後の政治・文学状況のなかで、1950年代以降の沙汀が農村基層社会にどのように向き合ったのかをみていくことで、1940～50年代の農村社会の変化をとらえることも可能ではないか。本稿では、日本であり知られることがない沙汀の歩みを整理したうえで、沙汀研究と農村基層社会研究との接続の可能性について検討したい。

2. 沙汀の歩んだ道¹³

沙汀は本名・楊朝熙、1904年農暦1月13日に四川省安県の地主家庭の長男に生まれた。安県は四川省北西部に位置し、四方が山に囲まれ、省内でも閉鎖的かつ経済的に遅れた県であった。そうした県において、父は科挙の試験で廩生(生員)になっており、当時は地域の知識人、有力者として現地では名をはせた人物であった。しかし、沙汀が5、6歳のころに亡くなったため、沙汀の母と父のきょうだいが遺産相続でもめ、楊家は没落の一途をたどることになる。その過程で、沙汀は母とともに、母の弟で叔父の鄭慕周の世話になるようになった。鄭慕周は辛亥革命後に四川各地を流浪し、哥老会(四川省の秘密結社)の一員(袍哥)として一定の地位を得て、軍閥傘下の部隊にいた。沙汀が12、3歳のころ、鄭慕周は上司の復讐のため、軍閥の団長レベルの司令官を殺害し、その部隊と戦闘となったことがあった。沙汀はそのとき、叔父の部隊に情報伝達や武器の輸送などをして、県城(県政府がある場所)や付近の市鎮、村を行き来し、地域社会の動向や人間関係を目の当たりにする経験をする。このときの経験がのちの四川省の農村や市鎮の社会を舞台とする小説執筆の基礎となった。

1922年、鄭慕周の紹介で成都省立第一師範に入学する。在学中は五四運動の新しい思想潮流に触れ、後に作家として手を携えて活躍する艾蕪と出会っている。1926年に第一師範を卒業後、北京に赴き北京大学受験を志すが、入学試験期間が過ぎていたのと、尊敬する魯迅が南方に居を移していたことから、四川に再び戻る。1927年には四川で共産党に入党している。当時の共産党は国共合作時期であり、沙汀は入党後、故郷の国民党の県党部で黨員拡大の任務の命を受ける。しかし、国共合作が破綻し、成都でも多数の共産黨員が逮捕され、任務が困難となり、1929年に上海に逃亡した。

上海では左翼文学活動に参加し、同郷の文学者と「辛壘書店」を創設した。1931年、沙汀は艾蕪と再会し、小説創作のため、魯迅に手紙で教えを乞う。魯迅はこの手紙に返信し、そのやり取りは「小説の題材に関する手紙」として魯迅の『二心集』のなかに収められている。この魯迅との交流が、沙汀と艾蕪に文学の道を歩む決意を固めさせ、沙汀の作風は魯迅の小説を基礎とするきっかけとなった。魯迅への手紙で吐露された2人の共通の悩みは、これまで自分たちが属し、よく知っている小資産階級の青年の諷刺や、時代の潮流以外に生きる下層人物を題材に小説を書いてきたが、貢献する意義はあるのかということであった。魯迅はそれに対し、戦う無産者ではなく、小資産階級の立場で下層人物を描けば、客観的な目で見ることになり、無産者に何も助けにはならないが、中国ではこれら2つの題材はまだ意味があり、突発的に革命的な英雄が登場する作品でなくても、現在書けることから書いたほうがよいとし、まだ異なる階級同士のあり方がよくわかっていない状況であること、生活の様子は時代の記録となるからとも言っている。こうした魯迅からの励ましを受けて、沙汀は1932年に初めての短編小説『法律外的航線(法規外の航路)』を発表する。この作品はリアリズム小説家・茅盾(1896～1981)の注目されることとなり、沙汀は魯迅や茅盾らが提唱する革命現実主義的な創作方法を目指すようになる。同年に左翼作家連盟に参加し、翌年にはその要職、小説散文グループ長に就いたのはそうした流れによるものであった。

その後、故郷四川の軍閥統治下における農村社会を題材とする短編小説を発表し続ける。1936年には中国共産党に再加入し(一時期、組織との連絡が途絶えていたため)、日中戦争が勃発すると、成都に戻り、協進中学の教師をしながら、共産党の指導のもと文芸界における共産党以外の人々(党外人士)との団結の任務に従事していた。このときに著名な四川作家・李劫人(1891～1962)や北方から四川に疎開してきた陳翔鶴(1901～1969)、何其芳(1912～1977)、卞之琳(1910～2000)らと友人になっている。1938年に周立波(1908～1979)の『晋察冀辺区印象記』を読んで啓発を受け、組織の許可を得て妻とともに延安に向かった。前述の何其芳と卞之琳とともに延安に赴いている。そこで毛沢東と初対面し、魯迅芸術学院文学系の代理主任となり、賀龍(1896～1969)が指揮する軍隊について山西省西部、冀中根拠地に行き、根拠地の創設を視察した。その体験をのちに『隨軍散記』としてまとめている。沙汀は前線で生活をして小説の材料を集めようとしていたが、賀龍の性格に魅せられて彼を題材とする文章を書くことに注力する。その後、家族の事情と創作上でも西北や華北の人情や風土に不慣れなために困難が生じたため、慚愧の念を抱えながら延安から離れ四川に戻ることを決意する。

1939年冬、周恩来(1898～1976)がトップの中共南方局の指導のもと、重慶で文芸界の組織連携業務に携わる。1940年には『新華日報・文芸之頁』が開催した「民族形式座談会」に参加している。「民族形式」は1938年10月中共拡大六中全会における毛沢東の報告「新段階論」の第7章「民族戦争における中国共産党の地位」のなかで言及された言葉である。そこではマルクス主義の中国化が叫ばれ、「新鮮で生き生きとした、中国の民衆によろこばれる中国的な作風と中国的気質を生み出さなければならない」と述べられ、文芸界はそれを受けて中国的作風と気風の性格をもつ「民族形式」の創造という課題が提起された。日中戦争の拡大にともない、文芸界のなかでは民衆を抗日戦争

という民族の大事業に目覚めさせなければならないという使命が強調されるようになり、小説やルポルタージュ、劇、民謡、講談などの形式(いわゆる「旧形式」の範囲に入る)がさかんに発表されたが、戦線が膠着すると上記の「民族形式(いわゆる「新形式」)」が必要とされたのである。沙汀が力を入れていた小説は資本主義社会の知識人による産物で「旧形式」として俎上にのせられたが、沙汀は広範囲の大衆を抗日戦争への参加を動員するために、「旧形式」の利用も文芸活動の主力におくべきという立場をとった¹⁴。一方で小説の内容については、人民大衆・民族の立場にたつべきという考えだった。

皖南事変の勃発で国共の対立が激しくなると、沙汀は故郷に避難し、周辺を転々としながら小説創作を続けた。この潜伏期間中が、沙汀創作の黄金期であった。この時期に代表作とされる長編小説の『淘金記』、中編小説『閬関』、短編小説『在其香居茶館里』などを執筆している。これらの作品は四川を舞台に、その農村基層社会の暗黒部分、郷長・保長・勢力のある地主の利害対立やそれにともなう下層民への圧力などをテーマとし、自身が熟知している四川農村の口語や習慣などを運用しながら活写し、当時の文芸界で高い評価を得た。

沙汀が故郷に潜伏中の1942年5月、毛沢東が延安で開催された共産党の文芸座談会で講話を行い、それをもとに『文芸講話』がまとめられた。前述したようにこの大方針は1940年代以降の文学の方向性を規定し、「文芸が政治に奉仕する」路線への契機となった文献である。当時の歴史的な状況は日中戦争が膠着状態にあり、思想方面での統一が必要とされていた。文芸方面では農村社会の社会経済状況、権力関係、人間関係、意識形態などを理解し、それをもとに社会を再組織化することが最も切迫した課題であった。沙汀は当時根拠地で文化運動の要職にあった周揚(1908～1989)から抗日根拠地の生活や闘争を反映することこそに意義があり、前線に帰ってくるように勧められたが行かず、1944年秋になってから重慶に赴き、初めて『文芸講話』を読み、党が組織した『文芸講話』の学習に参加している。整風運動のなか、沙汀は共産党の文芸工作者として過去の作品の価値について再検討を迫られた。

長編小説の『困獸記』は、沙汀が潜伏中の生活苦のなかで書き上げられ、その内容は基層社会の暗黒面だけでなく、小学校教員という最も下層の知識人が生活苦なかであがきながらも苦境を脱する道を暗示している。沙汀は小説という旧形式であっても社会の暗黒面の暴露と諷刺を特色とする作風から新しい内容に転換しようとしていたことがうかがえる。この重慶滞在期には作品評価の高い短編小説の『堪察加小景』(のちに『一個秋天晚上』に改名)も執筆している。

1944年は日本軍による大陸打通作戦の影響で、大後方には重慶陥落の危機感があった。中共南方局は四川省西部への疎開計画を提起し、沙汀はその計画に関与し、成都の文芸界と連絡するために、1944年末に重慶を離れた。成都に到着後、四川大学で教職について生活を維持しようとしたが、国民政府の教育部関係者も疎開してきたため、共産党員の沙汀は居場所がなく、故郷の安県に再び戻り、四川の「解放」に至るまで潜伏生活を余儀なくされた。1945年8月に日本が降伏し、一度は重慶に赴いたが、抗戦勝利の雰囲気もつかのま、国共関係が悪化し内戦の危機が高まると、沙汀の逮捕令が出たからである。沙汀はこの時期に長編小説の『還郷記』の執筆を開始していた。

このとき、沙汀は重慶や成都で過去の作品が「典型的な客観主義」「客観主義と形式主義の結合」「機知に富む思わせぶりの趣味主義」といった辛辣な批評をされていた。つまり、「真実」を描くことには成功しているが、「深刻さや感動させることができていない」ということである。こうした批判や評価は、沙汀の創作上の方向性にも影響を与え、農民が虐げられ、反抗に至る過程を描くことの必要性を感じ始めた。

そうした中で書き上げられた『還郷記』は山岳地域の農村を舞台に、青年農民の馮大生が壮丁として売られた後逃亡・帰郷し、妻を奪われた恨みから、保長などの基層社会の役人たちと繰り広げる闘争を描いた作品である。結局主人公は恨みを果たせず、故郷を離れるところで物語は終わるが、前二作の長編に比べ積極的な主題設定と反抗の精神をもつ農民を描いたことから、それまでの批判に答えた形で創作したといえよう。

1949年冬、国共内戦で最後まで国民政府の戦時態勢を支えていた四川省も、人民解放軍に東部・北部から攻め込まれ、重慶も占領された。沙汀の潜伏していた安県は12月27日に「解放」された。沙汀の叔父・鄭慕周は前述のとおり軍閥統治時代から地域の有力者であったため、地域の安定のために協力を求められ、県政府からの命令で沙汀に連絡をして呼び出している。こうして長い逃亡生活に終止符がうたれ、沙汀は1950年1月、成都に向かった。成都に到着後、中共四川省党委員会の王維舟(1887～1970、軍人)のもとに行き、川西区党委員会の文化接管委員会の指示のもと、成都の文芸界との接触、党の方針や政策の宣伝、党員の発展の任務をうける。接管委員会は過渡期の組織で、のちに中国文学芸術界联合会(略称：文聯)の川西区の主任として勤務することになった。共産党政権の文聯のもとで、文芸活動に従事する人々は組織化されていくが、沙汀は古参の党員として組織化業務の先頭に立った。具体的な仕事は、文芸界の人士を招いて座談会を開催することであった。座談会では『文芸講話』の学習が中心に行われた。のちに作家の創作表現は制約されてくるが、1950年代初めは比較的自由な雰囲気で作成することが可能な時期であった¹⁵。

沙汀は文聯での職を得ることができたが、当初、政治的身分の証明は困難を極めた。抗戦および内戦中、南方局の許可を受けて故郷の安県に潜伏していたものの、故郷や成都の党組織部とは指導関係になかったからである。また、袍哥に属していた叔父の鄭慕周のはからいで各地を転々としていたことから、共産党にとっての「反動勢力」とのつながりも多少あり、こうした「反動勢力」の地元の人々が沙汀のところに来て共産党政権へのとりなしを頼むこともあった。とはいえ、日中戦争中に延安に赴いたこと、賀龍について前線で文芸工作を行ったこと、潜伏中の9年間に国民党政権の暗黒部分を暴露する小説創作を継続したこと、成都の文芸界に知己が多くいることで、輝かしい経歴をもつ文芸工作者と位置づけられ、党とそのほかの文芸界人士の仲介役として活躍した。

川西文聯成立まもなく、沙汀は党から西南文聯の設立準備のため重慶への異動命令をうける。この異動命令は当初受け入れがたく、3回目の督促を経たあとでようやく重慶に赴いた。行政の仕事よりも小説の創作を志しており、熟知している川西地域から離れたくなかったからである。重慶では長年の親友である艾蕪と再会した。艾蕪は重慶市の文聯副主任として、沙汀は西南文聯の副主任として共同して仕事を行うこと

が多く、協力して行政関係の仕事と演劇の脚本の修正を重点的に行っている。

しかし文聯の仕事は創作に影響し、沙汀は思うように小説の執筆に専念できないことに苦悩していた。折しも、反革命鎮圧運動・抗米援朝運動・土地改革運動が積極的に展開され、文芸界はこの三大運動を宣伝することが求められていた。特に四川では、1951年春から本格的に土地改革運動が開始し、沙汀の創作意欲をかきたてた。沙汀は再三上層部に対し、土地改革の現場に赴いて創作の材料を集めることを希望している。1951年3月には重慶付近の巴県に半月ほど滞在し、8月には成都付近の石板灘に赴き、土地改革の様子を視察している。

材料を集めたものの、年末には「三反」「五反」運動が全面的に展開し、職場において会議を開いて大衆運動を実施しなければならなくなった。文聯は「反汚職・反浪費・反官僚主義」の「三反」運動が中心で、具体的には組織から汚職・浪費・官僚主義的な人物いわゆる「老虎(トラ)」のあぶり出しが行われた。沙汀は運動の過程で、ある美術関係の職員に対して乱暴な批判をしたため、自己批判の経験もすると同時に、文聯における暴力行為も目撃しており、運動の当事者であったことを認めている。後年、「四人組」失脚後、当時の運動で打倒された人々の処理が重かったと感じ、その名誉回復のために文書を書いたという。

大衆運動とともに、沙汀の小説執筆を妨げたのは、中央の宣伝部からのドイツ訪問の命令であった。1952年冬のドイツ訪問は沙汀の視野を広げる経験ではあったが、土地改革の小説執筆は棚上げになった。帰国後も四川省・重慶市の文芸界組織の指導業務を任せられ、1953年1月には四川省文聯の主席に選ばれ、4月には中国文芸家協会創作委員会の委員として北京に呼ばれている。沙汀はこうした「雑務」で創作ができなかったこともあるが、文芸方面における引き締めも理由に挙げられるだろう。朝鮮戦争をきっかけとして三大運動が加速化・急進化し、文学創作においても、映画『武訓伝』批判を皮切りに、題材や描かれる人物が規定されるようになった。特に人物においては、「現実生活のなかに本質的に欠点のない完全無欠の英雄が存在している」とされ、「完全無欠の英雄」の典型の創造が求められた。沙汀はこうした趨勢のなかで発言することが少なかったが、過去の自分の作品は現在においても意義はあるが、人物の描き方に欠点が多く克服すべきだと認識していた。

1954年10月に開かれた文聯と作家協会の連合拡大会議で、『紅樓夢』研究に対する批判が出て、大規模な批判運動が開始した。また、1955年1月には1954年7月に胡風(1902～1985)が提出した『解放以来の文芸実践に関する報告』(通称『三十万言』)に対する批判(『胡風の文芸問題に対する意見』)が『文芸報』に掲載されたことを皮切りに、「胡風反党集団」批判運動も展開する。沙汀は批判運動に巻き込まれると、上層部のスローガンに従っていたが、次々に起こる批判運動に疲れ、創作のために四川に戻る希望を組織に提出し、折よく作家協会主席団拡大会議で作家を組織して農業合作化運動に参加させることが決議されたため、沙汀は四川の農村における生活と創作を許可された。

成都に戻ってまもなく、成都近郊の綿陽や三台県の幹部と連絡をとり、合作化運動についての資料の収集、聴き取りなどを行っている。そうした材料を生かし、沙汀は短編小説をいくつか執筆した。この時期に書かれた作品は、のちに『過渡集』に収めら

れて出版されており、農村幹部の自己犠牲にもとづく奉仕の精神や合作化への道に対する願いや熱情を描いている。沙汀にとっては新しい生活、新しい人物を描いた記念すべき短編小説群であった。

1957年夏から、反右派運動の展開以降、「真実を書く」ことを主張する理論や作品が批判されるようになり、文学創作における現実主義精神が影をひそめた。1958年から人民公社を基礎とする農業と工業の生産増大を目指す大躍進運動が開始すると、実態から乖離した生産目標値が短期的に設定され、農村基層社会は荒廃する結果となった。沙汀は反右派運動では成都の作家、特に重鎮の李劫人の「左」への転換を進め、丁玲(1904~1986)をはじめとする多くの文学者に対する批判運動に参加している。1957年11月の四川省文学芸術工作者代表会議において、『思想を整頓し、指導の作風を改進し、社会主義事業のために一層奉仕する』と題し、「大胆に暗黒面を暴露する」という取り上げ方は、「反動的な邪説」であると論じ、これまでの自分の作風を否定する内容を報告している。つまりこの時期の沙汀は次々に起こる運動のなかで、自らの作風を現実主義から英雄的人物を賛美する革命現実主義と革命浪漫主義に転換しようとしていた。

一方で、たびたび現場の農村に足を運んでいたため、人民公社の実態も少しは見聞していた。ただ、視察の対象である人民公社は先進的な実験公社ということもあり、ある程度粉飾された状態であったことは否めない。1960年に故郷から訪ねてきた親戚の話などから、人民公社の弊害と天災により農村が危機的状況であることを認識し始め、1961年になると成都まで食糧難の影響が広がったため、農村基層社会の負の側面も直視せざるを得なかった。そして沙汀は1961年に短編小説1本書いた直後、小説を書けなくなる。この時期の沙汀の日記には、小説創作をしなければならないと思いつつ、演劇の脚本や過去の作品の修訂を行って日々を過ごしている¹⁶。1962年には一篇の作品も書くことができなかった。

その後、文化大革命が開始するまで、妻との死別を経験しながらも、三台县尊勝郷、武勝県烈面区などの地を訪れて、大躍進時期の農村の困難な状況取材し、現実の「階級闘争」に注目し、生活を観察している。結果として出された作品は農村の階級闘争を過大評価し、極左的なスローガンや政策を読解するものであったが、沙汀は農村に赴いて生活しそこでの見聞をもとに創作するスタイルを貫いていた。

1966年4月に北京に会議に赴いた際に、文芸界では最大の規模の批判闘争が醸成されていた。5月に省委員会が文聯に「文化大革命」の指導に入る。全国に吹き荒れた文化大革命は、1950年代に活躍し批判闘争の先頭を切っていた文芸関係者すべてが批判対象とされた。沙汀は6~7月に自宅から出る自由を奪われ、2回の家宅搜索を受けた。年末には成都から名山県に身柄を移され、紅衛兵からの尋問を受ける。1967年には成都の昭覺寺に戻されて監禁され、批判闘争にかけられる日々で、1972年11月に釈放されたときには68歳になっていた。出獄しても「保釈」の扱いで外出は制限され、『四川文芸』の編集部配属されたものの、仕事に戻ることが許されたのは翌年のことであった。

釈放後、沙汀は延安で一時期ともに過ごした賀龍についての回顧録の執筆から活動を開始した。その後、1958年の三台县双龍郷の農民の水利施設工事を題材とした中編

小説『青桐坡』を2か月で書き上げている。1977年9月、沙汀は人民文学出版社の招きに応じて原稿を持って北京に赴き1か月滞在して、文革期に沙汀と同様に難に遭った文学者たちに面会している。翌年3月には中国社会科学院文学研究所の新所長就任を承諾している。その後、故郷に潜伏していた時期の回想録『睚眦十年』、長編小説『応変』と『抵制』を同時に執筆開始した。1980年に職を辞した後は成都に戻り執筆に専念し、健康状態がよければ、故郷の安県、綿陽県、広漢県などをまわり、郷の幹部に取材をした。1981年4月に白樺『苦恋』批判があり、再び文芸界への圧力が強まったが、『抵制』を書き上げ、『木魚山』と改名して1984年に出版している。

『木魚山』は『青桐坡』と同様に、大躍進時期の農村基層幹部・大衆と上層部から派遣された指導幹部とのあいだの闘争を描いた作品だったが、『青桐坡』では描けなかった指導幹部の盲目的指揮によってもたらされた農村の困難な状況も題材にして人々に当時の生活を振り返らせている点で、前作の『青桐坡』より評価が高い。

ただ釈放後に書かれたなかで最も評価が高く、沙汀自身も満足している作品は、『応変』(のちに『紅石灘』と改名、以下『紅石灘』とする)である。『紅石灘』は作品のなかでも最も構想時間が長く、1949年の「解放」前後の農村基層社会の動向を活写したものである。登場人物は沙汀の最も得意とする行政の末端に存在する郷長・保長・地域有力者も含まれているため、1940年代の小説と基層社会の描き方に大きな変化はない。ただ「解放」初期の農村基層社会の様子を盛り込むために、取材に多くの時間をかけ、1950年代初頭に川北行署主任だった胡耀邦(1915～1989)に当時の四川省北部の農村の状況を聞いて、執筆計画を報告している。また土地改革の視察のために訪れた石板灘での調査経験もこの作品の構想に生きている。沙汀にとっては、最後の小説創作となった。

執筆と同時に力を入れたのは、四川出身の後進作家の育成であった。特に『許茂和他的女兒們』で茅盾文学賞を受賞した周克芹(1936～1990)に目をかけ、創作に打ち込めるように気を配っている。1992年12月に死去するまで、こうした四川作家の動向を気かけ、同じく共産党員で沙汀が文壇に引き入れた馬識途(1915～)に雑誌『四川文学』で新進作家を盛り立てよう託している¹⁷。

3. 沙汀研究の可能性

冒頭で述べたように、これまでの沙汀研究の中心は1949年以前の作品にあった。今後は人民共和国成立以降の沙汀とその作品研究を進めるべきだと考えている。

鈴木将久は「中華人民共和国の文学をどう読むか」のなかで、文革終了後の1980年代の中国現代文学研究がそれまでのイデオロギー先行の反動で審美主義や脱イデオロギーに偏り、文学における政治的要素が忌避されたため、1949年の建国から文革までの文学いわゆる毛沢東時代の文学が研究されなくなったとしている¹⁸。ただ、近年、それを問い直す動きが出てきているとも指摘する。つまり、当時の時代状況で「政治」と「文学」がどのような意味を持っていたかを問い直し、歴史的な現場に立ち戻り、文学を歴史的に読み直そうという動きである。例えば、雑誌『文学評論』2015年第6期における「『社会史視野下的中国現当代文学』筆談」特集で、文学研究への「社会史的視野」の導入が提起され、文学研界に活発な議論を提供した¹⁹。鈴木将久はそれを

受けて「社会史視野」による文学研究の方法の特徴として、当初の目的は1980年代の視野の限界を突破し、自らと距離のある過去の時間、特にその時代の生活世界に接近する試みであること、生活世界を重視し、「断片化された」事実を避けて、それぞれの事物間の相関性を理解することに努め、一つの時代の「全体性」を理解すること、それにより流動性の高い「知覚経験」を重視し、「情感」を切り口に生活世界の「全体性」と「構造化」を理解することにあるとまとめている²⁰。最後の一節を筆者の理解で簡単にまとめれば、その時代を覆う時代の雰囲気とそれが制約する人々の行動様式や思想の全体像を明らかにすることが重要だということであろうか。そして鈴木自身は「社会史視野」の方法は生活と感覚面で世界が顛倒する大変革をした1950年代の中国文学研究には有効であると主張する²¹。沙汀の創作の歴史をみると、1949年以降の作品の検討や創作過程で何を目指したのかを探究することで、中国近現代農村社会の変化の一端をみることができると考えている。

最後に、沙汀研究を切り口に中国農村基層社会(四川省が中心となるが)を理解する展望を示したい。前節で述べたように、沙汀は農村の生活に深く入ることで小説の創作に取り組もうとしていた。それは『文芸講話』で示された「必ず大衆の中へ、長期間無条件で、全身全力で工農兵大衆のなかへ、熱い闘争のなかへ、唯一最も広大な最も豊富な源泉の中に行ってすべての人、すべての階級、すべての大衆、すべての生き生きとした生活形式と闘争形式、すべての文学と芸術の一次的な資料を観察・体験・研究・分析しなければならない。そうした後でようやく創作過程に入ることができる」という方針を常に心に刻んでいたからである。

前節で触れたように、1952年、沙汀は農村の一大変革である土地改革の取材をし、小説創作につなげたいと考えていた。その際に四川省華陽県の石板灘の土地改革を視察している。そのときの日記は、のちの小説創作のためにつけられたものだが、最終的に創作につながらず、日記の一部のみ公開された²²。その中には、地主に対する闘争大会に参加し、創作上でいくつかの概念を思いつくも、まだ執筆するには至らない様子が書かれているが、創作メモとして次のような一節がある。

まず人物問題について。どうやっていわゆる新しい性格を表現すべきか？いつも考えるとき、感じるのは次のようなことである。私は「新しい」という字にとらわれすぎて、「新しいものは古いものから発展する」という理解に至っていないことは非常にはっきりしている。もし、私たちが農民大衆の質朴さや忠誠心、深く苦しみを受けていることを肯定し、彼らがまじめに解放されたと感じて、ある一定の思想教育を得られたなら、ある種の思いがけない激情のもと、彼らはただちに新しい思想を得て、党の呼びかけに応じて行動するはずなのだ。

例えば、もし『還郷記』のなかの馮永生みたいな性格やあのような目にあった人を現在の条件にあてはめると、解放後の新しい農民を書けないはずがない。これはあきらかに可能なのである。問題はわれわれが彼を一定の闘争や矛盾や立ち上がって前に進まざるをえないという条件のもとにおかなければならないということにある。しかも、私が思うに、間違いの認識というのも難題で、私が接触した農民たちのなかに、馮永生のような人を見つけられなかったからにはかならないが、馮永生も加工した人

物で、自然状態ではない。それならば、私が忠誠心のある真面目な農民をモデルとして思い切って選んで、塑像していきさえすれば、問題は解決するのだ。しかし、我々是我々の人物をすさまじい闘争や場面の中に入れる必要があり、つまり、大きな力で闘争の雰囲気をはきわたらせるべきである。

彼らに個人の得失について考えさせないように力をつくすべきで、これは実現可能で合理的であるというのがカギである。ただここでいう個人の得失とは、個人の階級の恨みについて指しているのではなく、反対に、ある程度強調することは必要である。なぜならそれが一種の原動力だからである。したがってこれと関連して、個人的に恨みに報復しようという感情を発散させることもすこし表現するべきである。

それから、これらの新しい人物の多くは行動する人で、誠意があって自信がある人でもなければならない。したがって、彼らを激しい階級闘争、生産闘争のなかにいれなければならない。

以上の一節と土地改革の視察日記をみると、地主の闘争大会は実際に激しく行われているものの、その原動力は個人的な恨みや利害であり、沙汀は書きたい「正面人物」に実際に会っておらず、創作に困難を抱えている様子がみとれる。自身がかつて執筆した『還郷記』に登場する、壮丁として拉致され妻を奪われた恨みを報復するために基層社会の実力者と対決する馮永生を加工すれば、「新しい人物」が描けるとしながらも、実態と乖離する人物塑像は難しかった。つまり、沙汀は見聞したこと、実際に会った人物をもとに物語を組み立てる作家なのである。そして、1940年代と変わらず、創作の題材や方法を変えることができなかった。土地改革を主題とする小説は書けなかったが、その後、いくたびかの取材に基づき、『過渡記』に収録されている短編小説群、『青桐坡』、『木魚山』では農村基層幹部に焦点をあてている。1940年代と異なり、農村基層社会の末端にいるのは、党の幹部であった。こうした人物を表現対象とする小説の創作過程と作品をとらえなおすことにより、1950年代以降の農村基層社会のあり様をみる可以考虑している。別稿に期したい。

-
- 1 沙汀作品の日本語翻訳は少なく、管見の限りでは守屋洋訳「茶館にて」小野忍・竹内好・中野重治・増田渉・松枝茂夫編『中国現代文学選集7 抗戦期文学集I』平凡社、1962年(原典は短編小説「在其香居茶館」と上田望・王岳川訳『「一個秋天晚上」訳註』『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』6号、2003年3月の2篇である。
 - 2 天野祐子「戦後内戦期における国民政府の減租政策と基層社会：四川省を中心に」『史論』(栗原純教授・芝健介教授退職記念)69号、2016年3月。
 - 3 尾坂徳司「沙汀おぼえがき」『法政大学教養部紀要』58号、1986年1月。同「沙汀おぼえがき2」『法政大学教養部紀要』62号、1987年1月。同「沙汀おぼえがき3」『法政大学教養部紀要』66号、1988年1月。
 - 4 中裕史「沙汀と艾蕪 人物形象の対立と補完」『アカデミア人文・社会科学編』(南山大学)、71号、2000年3月。
 - 5 中裕史「『抓壮丁』にみる四川作家の特色」『アカデミア文学・語学篇』103、2018年

- 1 月。同様の関心から中裕史「沙汀の妙味 小説の中の袍哥」『阿頼耶順宏・伊原澤周兩先生退休記念論集 アジアの歴史と文化』汲古書院、1997年所収といった研究もある。
- 6 金葵編『中国当代文学研究資料叢書 沙汀研究專集』浙江文芸出版社、1983年。黄曼君・馬光裕編『中国現代作家作品研究資料叢書 沙汀研究資料』中国社会科学出版社、1986年。
 - 7 吳福輝『名家簡傳書系 沙汀』中国華僑出版社、1996年。鄧儀中『中国現代作家評伝叢書 沙汀評伝』重慶出版社、1993年。吳福輝は中国現代文学館所属の文学史家で史料の発掘・整理に功績があり、沙汀についても専門に研究している。鄧儀中の経歴は不明だが沙汀と同様に四川省北部出身で、叢書の執筆者として吳福輝とともに資料の収集をし、沙汀にインタビューを重ねて評伝を完成させている。
 - 8 沙汀『沙汀文集』全10巻、四川文芸出版社、2017年。
 - 9 洪子誠著、岩佐昌暲・間ふさ子編訳、武継平・宮下直子・甲斐勝二訳『中国当代文学史』東方書店、2013年(原書は洪子誠『中国当代文学史』北京大学出版社、2007年)
 - 10 周哲「読『呼嘯』」『読書与出版』第2年第12期、1947年12月15日(黄曼君・馬光裕編『沙汀研究資料』所収)『大公報』で「客観主義」、「旧現実主義」、「自然主義」の論争で、沙汀の作品が取り上げられ、「客観主義」的だと批判されたと述べている。
 - 11 笹川裕史・奥村哲『銃後の中国社会 日中戦争下の総動員と農村』岩波書店、2007年。笹川裕史『中華人民共和国誕生の社会史』講談社選書メチエ、2011年。
 - 12 奥村哲編『変革期の基層社会 総力戦と中国・日本』創土社、2013年。笹川裕史編『戦時秩序に巣食う声 日中戦争・国共内戦・朝鮮戦争と中国社会』創土社、2017年。
 - 13 特別な注記がなければ、沙汀「我的傳略」1978年4月28日執筆、1979年修正(原載は『中国現代作家傳略』上、四川人民出版社、1981年5月。『沙汀文集 第7巻 文芸雜談集』、上海文芸出版社、1992年所収)、徐欽葵編集・執筆「沙汀小伝」(金葵編『中国当代文学研究資料 沙汀研究專集』所収)、吳福輝『名家簡傳書系 沙汀』と鄧儀中『中国現代作家評伝叢書 沙汀評伝』の2冊に拠っている。
 - 14 沙汀「民族形式問題」『文芸戦線』第1巻5号、1939年11月16日、同「在民族形式座談会上的發言」『新華日報 文芸之頁』第13期(ともに『沙汀文集 第7巻』所収。)
 - 15 朝鮮戦争をきっかけとして文芸界への圧力が強化された背景については、泉谷陽子「映画『武訓伝』批判と『愛すべき人』－毛沢東と習近平の『文芸講話』のあいだ」『2018年度フェリス女学院大学学内共同研究 ポピュリズムとアート報告書』フェリス女学院大学、2019年3月を参考にした。
 - 16 吳福輝編『沙汀日記』山西教育出版社、1998年。
 - 17 馬識途「一個問心無愧的人 悼念沙汀同志」『新文学史料』1993年第2期。
 - 18 鈴木将久「中華人民共和国の文学をどう読むか(文化交流茶話会トーク)」『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』32号、2019年。
 - 19 程凱「『社会史視野下的中国現当代文学研究』的針對性」、薩支山「『社会史視野』：『当代文学』研究的一個切入点」、劉卓「現当文学研究中的『歴史化』」が収録されて

いる。

- 20 鈴木将久「『社会史視野』的張力」『文学評論』2020年第5期。
- 21 1940年代の文学に「社会史視野」を適用した論考として、姜涛「20世紀40年代国統区文学研究中『社会史視野』的適用性問題」『文学評論』2020年第5期があり、沙汀の作品にも触れている。
- 22 沙汀「在石板灘（一九五二年四川華陽県石板灘参加土改日記片断）」『新文学史料』1991年第3期。